

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：62501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20064

研究課題名（和文）環境的要因と人為的要因との双方向検討による村落景観変遷史の研究

研究課題名（英文）Research on the history of village landscape changes through a two-way examination of environmental factors and anthropogenic factors

研究代表者

土山 祐之（TSUCHIYAMA, Yushi）

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・助教

研究者番号：00963216

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：文献資料と古気候データとを相互検証し、環境的要因が村落景観の変遷に与えた影響を明らかにすることを目的とした本研究では、佐賀県小城市を対象としてフィールドワークを展開し、生産に必要な水利灌漑調査および習俗・慣行の聞き取り調査を実施した。その結果、調査範囲全域の水利灌漑状況および水利慣行を把握することができ、かつGIS等を活用して調査成果を電子データ化した。文献調査では主に「小城藩日記」を対象に自然災害や景観変遷に関する史料の収集および古気候データとの付き合わせを行い、洪水・旱魃記事と古気候データとの相関関係を見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

用水下流域に位置する耕地を灌漑する目的で近世段階で新たに用水路が掘削された結果、その用水路の水を享受できない地域は現代に至るまで水不足に悩まされることになった。このことは、水不足という環境的要因と新規用水路掘削という人為的要因とが相俟って、特定の地域で現代に至るまでの慢性的水不足状態を発生させたとも言える。調査対象地における水利慣行は近世的秩序を引き継いだものであることが明らかとなったという学術的意義がある。かつ、こうした結果は聞き取り調査や景観調査などをもととしており、「かつて」の生活が現代の生活の深部にまで色濃く残存していることが把握できるという社会的意義もある。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to cross-examine documentary materials and paleoclimate data and to clarify the impact that environmental factors had on changes in village landscapes. Fieldwork was carried out in Ogi City, Saga Prefecture, where surveys of water irrigation, essential for production, and interviews on customs and practices were conducted. As a result, it was possible to grasp the water irrigation situation and water use practices in the entire survey area, and the survey results were digitized using GIS and other tools. The document survey mainly focused on the "Ogi Domain Diary," collecting historical materials related to natural disasters and landscape changes and comparing them with paleoclimate data, and a correlation was found between flood and drought records and paleoclimate data.

研究分野：日本中世史、環境史、災害史、荘園史、村落史

キーワード：環境的要因 フィールドワーク 景観変遷史 村落史 水利灌漑

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1980年代以降の日本中世村落史研究では、「人と人との関係史」から「人と自然の関係史」へと研究の視点が転換し、自然や環境に対する人の様々なアプローチが明らかにされてきた。その一方で、自然災害や気候変動といった環境的要因を取り入れた議論は少なく、環境的要因の人の生活への影響と、人びとがそれにどのように応答したのかという問いは課題として残されている。

環境的要因が議論に取り入れられない背景には、自然災害や気候変動を客観的に判断する方法がないという方法論的課題があった。ところが、近年めざましく進展した酸素同位体比年輪年代法による古気候データの整備によって、環境的要因を客観的に判断することが可能となり、環境的要因をとり入れた村落史研究を進める素地ができています。

そこで本研究では、村落における環境的要因の影響が顕著に見られる「景観」をテーマに、村落景観の変遷を、環境的要因とそれに対応する人々や村落の動向(人為的要因)との双方向から検討し、自然災害や気候変動に応答する地域社会・村落の実態究明を課題として設定する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中世から現代に至るまでの村落景観の変遷過程を、自然災害や気候変動などの環境的要因と、それに対応する人々や村落の動向といった人為的要因の双方向から検討し、自然災害や気候変動に応答する地域社会・村落の実態を究明することである。最終的には、GIS及び情報システムを用いて中世から現代に至るまでの景観変遷を可視化し、環境的要因と人為的要因を踏まえた新たな村落像を確立する。

3. 研究の方法

本研究では、佐賀県小城市を研究対象とする。当該地域では、すでに2019年度より科学研究費基盤研究(B)「西遷・北遷東国武士の社会的権力化」(代表：田中大喜)においてフィールドワークが実施され、中世的景観の復原も試みられているが、中世的景観と近代的景観を接合する近世的景観についての検討は不十分な状況であった。そのため、本研究では佐賀県小城市における近世的景観を水利灌漑調査、聞き取り調査などのフィールドワークと、文献資料から復原し、中世から現代に至るまでの景観変遷を連続的なものとして把握する。

4. 研究成果

(1) 慢性的な水不足と水利灌漑システム

本研究では、調査対象地の10集落で聞き取り調査を実施した。これらの集落はすべて小城市内を流れる祇園川から取水した用水を使用するが、用水路の下流域にあたる地域はいずれも慢性的な水不足が問題となっており、近年開通した導水事業によってやっと水不足が解消されたという。こうした水不足を発生させた要因に、降水量の少なさ(環境的要因)が挙げられるが、それ以外でも「取水は上流から」という当該地域における水利慣行も用水下流域に位置する集落にとっては水不足の大きな原因となっていたことが判明した(人為的要因)。

上記で特徴的な点が、最も水不足に悩まされているのが芦刈水道のすぐ北側に位置する集落という点である。芦刈水道は17世紀に開削されたという芦刈地域一帯を灌漑する水路で、水不足を解消するために作られた。その結果、芦刈地域の水不足は解消されたが、芦刈水道の用水を享受できない芦刈水道北側の集落は、先述した導水事業が完成するまで慢性的な水不足状態であった。このことは、水不足という環境的要因と芦刈水道掘削という人為的要因とが相俟って、特定の地域で現代に至るまでの慢性的水不足状態を発生させたことを表している。

また、同一用水を使用する集落との繋がりが強く、たとえ隣接する集落であったとしても、同一用水系統の水を使用していなければ、繋がりはそれほど深くない。例えば、旱魃状態の際には上流の集落に水を通してもらうこと(=上流集落による水の使用止)をお願いすることになるが、そのときは同一用水系統で下流に位置する複数の集落が共同で行っていた。一方で、旱魃で水不足が甚だしいときは、隣の集落(別の用水系統)から水を奪うことなどもかつては行われていたという。これらのことは、水を通じた地域的繋がりと地域秩序が形成されていたことを示しており、「用水路」が地域秩序を代表する「景観」である表している。

(2) 『小城藩日記』収録の災害・損亡記事と古気候データとの比較

本研究では18~19世紀を中心として連続した記事が残っている『小城藩日記』を用いて、損亡などが発生している時期の気候状況を検討した。その結果、旱魃や洪水記事などがある年には、古気候データも顕著な乾燥/湿潤傾向を表しており、相関関係があることが確認された。

ただし、これはあくまで見かけ上のことと思われる。研究期間中に古気候学研究者から指摘されたことであるが、今回使用した古気候データは中部日本の古気候復元データであるため、それを九州地方で用いて相関関係の有無を探ることは難しい。そのため、調査対象地における景観変遷を表す記事と古気候データとを比較検討するためには、九州地方における独自の古気候データ復元が俟たれる。本研究では、古気候データと文献資料とを突き合わせることは難しかったが、

新たな古気候データの必要性を文献資料研究者が提起することの意義は少なくない。今後、古気候学研究者と協働して研究を進めるといった新たな課題が発生している。

(3) 報告書の刊行、調査データのオープン化

佐賀県小城市を対象としたフィールドワークでは、水利灌漑以外にも慣行や習俗などの聞き取り調査を行っている。これらの成果は報告書として刊行する予定で、現在執筆に取り組んでいる。また、聞き取り調査や水利灌漑調査から得られた成果についてはすでに電子データ化が完了しており、近日中に総合資料学情報基盤システム (Khirin) に格納予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 土山祐之	4. 巻 -
2. 論文標題 法隆寺による春日神木動座・帰座への供奉について - 暦応年間を事例として -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京大学史料編纂所研究成果報告2022-8: 日本中近世寺社 記録 論の構築: 日本の日記文化の多様性の探究とその研究資源化	6. 最初と最後の頁 114 - 128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 土山祐之	4. 巻 11
2. 論文標題 「環境決定論」批判を乗り越えるために	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 REKIHAKU	6. 最初と最後の頁 88-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	田中 大喜 (TANAKA Hiroki)	日本大学・教授 (32665)	
研究協力者	貴田 潔 (KIDA Kiyoshi)	静岡大学・准教授 (13801)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------